

## 年 頭 の 辞

## 新年のご挨拶



一般社団法人 軽金属学会  
会長 岡本 一郎

新年明けましておめでとうございます。

本年も会員の皆様のますますのご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

まず、感染症でお亡くなりになられた方々に謹んで哀悼の意を表しますとともに、治療中の皆様やご家族に心よりお見舞い申し上げます。また、医療関係者をはじめ感染防止にご尽力されている皆様には心から敬意を表したく思います。

昨年は、新型コロナウイルス感染拡大により市民生活や企業活動の停滞を余儀なくされました。早期に経済活動を再開した中国や米国などで景気回復の動きがみられるものの、欧州などでは第二波、第三波の感染拡大も見られ、収束を見通せない状況下で先行き不透明感が継続しています。わが国においても、経済活動と感染拡大防止との両立により回復の動きがみられますが、予断を許さない状況が続いています。

こうした中であって、テレワークの浸透や巣ごもり需要の増加など新たな動きも見られるとともに、環境問題を背景とした軽金属材料への期待は引き続き高まっています。また、持続可能な開発目標も視野に入れ、低炭素社会、循環型社会の実現に向けた軽金属材料の果たす役割はますます重要になっています。軽金属学会は「軽金属に関する学術・技術の進歩発展を図り、工業の発展に尽くす」ことを目的に活動してきました。昨年を振り返りつつ、今年も新しい生活様式に配慮した活動に取り組みます。

講演大会は、第138回春期大会を昨年5月22、23、24日にかがわ国際会議場および香川大学幸町キャンパスで予定していました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大をうけ、参加者および関係各位の健康と安全を最優先事項として検討した結果、やむなく中止の判断を下しました。また、第139回秋期大会は東京都立大学日野キャンパスでの開催を予定していましたが、状況が改善せず、初めての試みとして11月7、8日にオンラインによる双方向ライブ配信を利用した講演大会を実施し、成功裏に138件の口頭発表と47件のポスター発表を終えることができました。今年の5月15、16日に開催される第140回春期大会もオンラインによる開催を予定しています。

昨年は軽金属に関するシンポジウム、セミナー、見学会など多数のイベントを企画していました。また、支部活動でも中堅企業向けセミナーや研修会、相談会、出前講座、工場見学会などを予定していましたが、残念ながら新型コロナウイルスの影響で多くが延期や中止せざるを得ない状況に至っています。そういった中でも、オンラインによる企画が活発化するとともに、感染防止対策を徹底した対面でのセミナー再開など、新しい生活様式に配慮した動きを進めてきました。研究部会は新設1部会を加えた15の研究部会活動を通じて新たな価値の創造を図っております。加えて、今年はロードマップの改定に向けた活動を開始します。なお、コロナ禍においても学会誌は順調に発行されていますが、投稿論文数の減少は懸念されるところです。今後も、充実した学会誌を提供できるよう議論を進めていきます。

国際交流の分野では第139回秋期大会の期間中に計画していたオーストラリア、中国、韓国、台湾の参加によるAsian Light Metals Association (ALMA) フォーラムが、参加者が来日できないため2年後へ延期となったものの、ALMA Meeting をオンラインで開催することができました。また、2022年に富山でのアルミニウム合金国際会議 (ICAA 18) 開催が決定し、組織委員会、実行委員会が準備を進めています。多様な人材がそれぞれの能力を十分に発揮しつつ成長しあえる場となる学会を目指し、男女共同参画委員会では秋期大会期間中の男女共同参画セッションや若手の会、女性会員の会などをオンラインで開催しました。

会長就任のあいさつ(本誌69巻6号)で、将来に向けてのキーワードとして掲げました「幸せを創る」軽金属学会については、「参加してみよう」「会員で良かった」と思える学会作りのための施策を総合計画員委員会などで議論しました。施策の一環として会費および会誌送料などについての見直しを行い、4月から改定することとなります。

今年は軽金属学会の前身である「軽金属研究会」発足から70年という節目です。本会のさらなる発展・拡大を目的とし、創立70周年記念事業を企画します。社会情勢が厳しいため、祝賀会を伴う記念式典など祝祭的な行事は行わず、これまで実施してきた事業の充実と強化に重点を置きつつ、外部に向けた本会アピールも同時に行うことを考えています。

本会の将来を築く新たなステップとなるよう学会運営に努めてまいります。より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。